JIM-NET便り



サダコの折鶴とイブラヒム

■ 大倉記代さんの訃報

「サダコ」・虹基金の発起人であり前代表の大倉記代(おおくらきよ)さんが6月23日、がんのため東京都内の病院で逝去されました。

大倉記代さんは、4歳の時に爆心地から3.3kmの自宅で被爆、1955年入院した広島赤十字病院で「原爆の子の像」のモデルになったサダコ(佐々木禎子さん)と同室となり、ともに闘病生活を送りました。大倉さんは、長い間サダコとの思い出を積極的に語ろうとはしませんでしたが、サダコの50年目の命日にあたる2005年10月25日『想い出のサダコ』を出版し、その「死」の側から語られることの多かったサダ



佐々木禎子さん(左)と大倉さん

コを、輝かしい「生」の部分から語ることで、私たちに暖かい平和へのメッセージを送ってくださいました。

『想い出のサダコ』出版の翌年、「長年心に思っていた、禎子ちゃんの死を今ある命につないでいく仕事」として「サダコ」・虹基金を立ち上げ、イラクの白血病に苦しむ子ども達のためにJIM-NETに定期的に寄付を続けてくださいました。

しかし、『想い出のサダコ』を執筆しているころから、ご自身の健康状態も悪化し、今年3月には健康上の理由から「サダコ」・虹基金の代表職を『想い出のサダコ』の挿絵を描いた夜川けんたろう氏に託し、6月23日、とうとう帰らぬ人となりました。

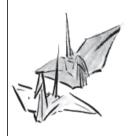


イブラヒムと談笑する大倉さん

■ 大倉さんとイブラヒム

昨年8月、ローカルスタッフの イブラヒム・ムハンマドが来日し 約1か月間にわたるスピーキング ツアーを行いました。広島平和記 念資料館を訪れた時のことです。 イブラヒムは、時には嘆息を漏ら し、時には舌打ちしながら、展示 物を一つひとつ丁寧に見ていまし た。彼の悲しみ、怒り、やりきれ なさといった感情、そして平和へ の強い思いが一緒にいた私たちに も痛いほど伝わってきました。 バスラの病院の院内学級で、常に子どもたちの近いところにいて、彼らの苦しみを共有しているからなのでしょうか、イブラヒムは、とりわけ子どもの犠牲者に関する展示を熱心に見ていました。中でも佐々木禎子さんの折鶴の前ではまるで凝固してしまったかのように、円筒形のケースの中を食い入るようにじっと見ていました。

そんなイブラヒムに、思いがけないプレゼントがありました。東京で行われたJIM-NE T代表の鎌田實医師との公開対談『いのちをつなぐ~医師・鎌田實とイラクの先生イブラヒム、夏のおしゃべり~』終演後、大倉記代さんから、イラクの子どもたちへと佐々木禎子さんの折鶴を二つ託されたのです。「サダコ」とイラクの子どもたちが強い絆でつながった瞬間でした。後にイブラヒムは、この度の訪日で最も感動した瞬間のひとつだったと話していました。



大倉さんの訃報に接したイブラヒムは、大切に保管していたサダコの 折鶴を家族に見せて、東京での大倉さんとの出会いと大倉さんの生い立 ちを話したのだそうです。イブラヒムの家族は大倉さんの生い立ちに涙 を流し、イラクの子どもたちへの大倉さんのご厚意に心から感謝し、一 緒に写った記念写真の中の大倉さんの姿を尊敬の眼差しで見ていたそう

です。そしてイブラヒムの家族はみんなで大倉さんのご冥福をお祈りしたのだそうです。 イラクの子供たちとJIM-NETへの、大倉さんの生前のご厚意に、心より感謝し、謹んで ご冥福をお祈りしたいと思います。







バスラ緊急支援報告

■概要

3月25日に起きたイラク政府軍とムクタダ・サドル師のマハディ軍の衝突は、バスラ地域の都市機能を完全に麻痺させた。外出禁止令が出され、道路は封鎖され、電気と水道の供給もほぼ全域で停止した。紛争が長引くにつれて、食糧不足や物価の高騰など、市民生活に大きな影響が出た。JIM-NETでは、通常、イラクの小児がん・白血病の医療支援を行っているが、バスラ危機に関しては、通常の支援対象に限らず緊急支援を開始することを決定した。その目的



食糧と水の配給

は、最悪の人道危機を防ぐことであるが、一般的な緊急救援は、国際機関や国際NGOが大規模に行うものと思われたので、主に、JIM-NETが支援している小児がんの子どもたちが紛争で受ける被害、治療中断などを最小限にとどめることを目標にした。また、支援活動を通して、イラクの再建や恒久的平和の実現のための日本の対イラク外交のあり方を問いかけるきっかけを作ることを目指した。

JIM-NETの緊急救援指針	アクション	予算
1. 被災地に対する緊急人道支援人道的な危機の回避と、支援活動を行っている国際機関(国連、赤新月社)、国際NGOへのサポート、地域のNGOなどを支援	① サフワンへの給水(赤新月社と共同)② ズベイルへの食糧支援(Mercy Corpsと共同)	285,285円
2. 今まで支援してきた「がんの子どもたち」の救援を最重点課題とする ① 病院が再開した際に治療に必要な薬などを準備する ② がんの患者を中心に、水や食料の配給を行う ③ 紛争による物価高騰で病院に来られない子どもたちには交通費を支給する	① 4月~5月バスラ薬支援② 食料配給(400家族) 病院での給水(32t×11回)③ 23名の交通費を支給	1,504,965円 1,081,500円 244,283円 221,025円
3. アドボカシー 支援活動を実施する過程で、主に日本社会へイラクの情勢を伝え、注意喚起する。日本のイラク外交政策へ提言していく。	 ●メディア:信濃毎日新聞、 読売新聞(北海道版)、北海道 新聞、NHK地球アゴラ、ク リスチャン新聞等で報道 ●報告:9条世界会議/G8市民 サミット 	

2) 支援結果

今回、ローカル・スタッフがヨルダン出張中に紛争が始まったために、バスラの友人・知人らへの電話で毎日情報収集し、アラビア語のメディアなどとの比較分析を行った。東京に本部を設け、危険度を5段階に設定し、それぞれの段階でのアクションプランを作成した。

4月5日、事務局長がアンマンでヨルダン駐在スタッフらに合流、UNAMI、UNICEF、W HO等から情報収集したが、国際機関は意外にも緊急事態は終了したとの認識であった。しかしながら、バスラへの民間機は飛ばず、クウェートの国境は閉鎖されイラク人への査証は発給されない状況が続き、衝突も部分的に続いている。メディアも国連関係者も関心が薄いという印象だ。そこで、唯一バスラで活動を続けているNGOであるMarcy Corpsとクウェートで接触。Marcy Corpsは「武器を持たず、護衛もつけない」という活動規範を守って緊急支援を行っていた。

食料はすでにバスラ内で購入が可能になっていたが、物価の高騰で食料購入が困難な状況 にある貧困家族をピックアップしてもらい、フードパックを配給。4月21、22日の2日間 で18か所で合計400家族分の食料パックの配給を行った。支援対象者は、モスクや赤新月 などローカル・コミュニティに依頼し選択した。(選択の基準は下記を中心にし、次の内容の食糧パッケージの配給をした。

- * 日雇いなどの日当に頼っている家庭
- * 孤児
- * 離婚した未亡人
- * 国内避難民
- * がんの子どもを持つ家族



• 米:10kg

・砂糖:1kg 食用油:1リットル

・ミルク: 1kg

・レンズ豆: 2.25kg

(家族構成にもよる が、1家族約3日分)

以前から、サフワンの赤新月社職員とつながりがあったこと、また、クウェートからの物資の中継地点ないしは拠点としての期待もあって、サフワンの給水を計画、実行した。サフワンは、湾岸戦争でも劣化ウラン弾を使われたところである。バスラ市内から離れているので治安はよいが、物流が閉ざされる厳しい地域である。2000トン分をペットボトルでクウェートで購入し配送の手配をしたが、クウェート国境で税関手続きに時間がかかり、サフワンで配給できたのは5月3日になった。

がんの子どものプロテクション

- ・JIM-NETの現地スタッフが病院で同様の食糧パッケージを配給。がん病棟だけでなく、病院に来た患者全員を対象にした。病院の倉庫には食料を置くスペースがないので、スタッフの自宅を倉庫にして、一週間かけて病院で運び配給。ズベイルのガンのこどもを持つ家族に関しては、JIM-NETのローカルスタッフのイニシアティブでMercy Corpsが配給する予定であったが、安全上の理由でローカルスタッフが自宅に届けた。
- ・23名の患者に、病院に来られるように交通費を支給した。
- ・4月末から病院が断水した。その後給水設備の老朽かも重なり、病院は深刻な水不足に陥った。32トン給水車で、4月30日から6月4日までの間に合計11回の給水を行い、総量は352トンになった。また、薬を貯蔵するための冷蔵庫が故障したとの報告もあり、病院の設備の改善が求められている。
- ・病院がリクエストしてくる薬に関しては、1月に日本の製薬会社が寄付してくれた薬などを大量に送っていたため、しばらくはストックがあったが、それらも底をつき始めてきたので要請が増えてきている。今後、月額8000ドルは必要。

■ 緊急支援 詳細

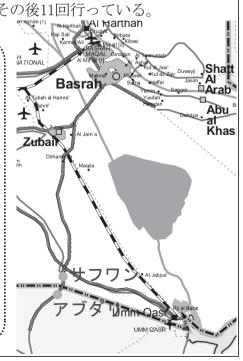
●サフワン水支援		\$	¥	%
水2トン		1667		
クウェート側通関		300		
遅延による手数料		300		
イラク側通関		200		
国境-赤新月社(輸送費)		100		
積荷卸代		50		
スタッフ交通費(ズベイルー	-サフワン)	100		
	合計	2, 717	285, 285	10%
●食糧配給 (病院)				
米(インド米)10kg×400		4, 297. 5		
砂糖(ブラジル)2.5kg×40	00	892.6		
オイル20リットル×400		1, 636. 4		
ミルク10kg×400		2, 859. 5		
輸送費(トラック)		614. 0		
	合計	10, 300. 0	1, 081, 500	37%
●ズベイルへの食料配給				
	合計	10,000	1,050,000	36%
●病院への給水				
11回 ※		2, 326. 5	244, 282. 5	8%
●交通費・宿泊費				
宿泊費		260		
日本一アンマン、クウェー	-トー日本		170,000	
アンマンークウェート(2)	人)	303.87		
クウェートーアンマン		248		
	合計		255, 246. 4	9%
	総計		2, 916, 314	100%

※ 病院への給水はその後11回行っている。

バスラから南に30分くらい車で走ったズベイルでは、 ウム・アハマッドという女性の協力で、400世帯に食料 の配給ができた。イスラムでは、女性が見ず知らずの男 性と話したりするのは難しい。そこでウム・アハマッド が、援助の必要な家族を献身的に探し出し、リストアッ プしてくれたのだ。

彼女自身、夫はすでに定年退職し、七人の子どもがい て貧しいのだが、孤児や未亡人を支援する活動には積極 的だ。

「私はとっても幸せです。貧しい女性たちを支援する仕 事を手伝えて。見てください、彼女たちの笑顔を!」



系急報白 バスラから来た医師が語る

戦火の中の病院、

スピーカー: Dr. フサム (バスラ産科小児科病院) た 佐藤真紀 (JIM-NET事務局長)

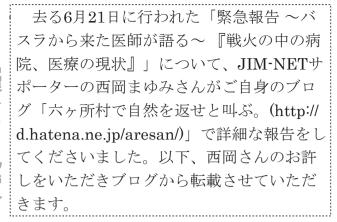
ゲスト: 熊岡路矢 (JVC理事)

6月21日(土)午後2時~4時半

明治大学リバティタワ-9F 1094教室

共催:JIM-NET(日本イラク医療支援ネットワーク)

現代史研究会



今日講演を行ったフサム医師はバスラ産科小児科病院の小児がん専門医。今回は別の用で来日中のところを時間を取ってもらって講演ということになったそうです。以下、フサム医師の講演の内容と質疑応答中のことばを箇条書きします。

- 1,薬、医療器具、洗浄用品、機器、検査キット、人員、輸血用の血液、レントゲン、ベッド、酸素、水、すべてのものが足りない。
- 2, 紛争が起きたため、輸血用の血液がけが人にまわされた。酸素ボンベもなく、1本を 4人で分け合っているような状況。
- 3、1998年から白血病や悪性腫瘍がぐっと増えた。戦争との関係が疑われる。
- 4、水頭症や脳水腫が戦後増えた。抗生物質がなく治療できない。
- 5, 家族が迷信を信じ、手放される病気の子供がいる。健康であっても、病院に置き去りにされる子供が月2、3人いる。父親の戦死により育てられるか母親が悲観したものと考えられる。
- 6, 産油国であるにもかかわらずガソリンが市場にでまわらない。(道路で子どもがガソ リンを売っている写真を見せてくれました。)
- 7, バスラは繁華街で殺人が起こるのが珍しくない状態。
- 8, NGOが建てた小児がん病棟では、プレイルームもあり、バースデイパーティなども 行っている。しかしベッドが足りないので、床に寝かされる子供もいる。
- 9, 金銭面や、安全面の問題で病院に来られず、その間に病気が進行する子供がいる。 (患者の20%は治療を中断する。)
- 10, 小児がん患者の30%は死亡する。特に1歳から5歳にがん患者が多い。
- 11,戦争が終わり、米国が撤退すれば、自分たちは自分たちの国を作り、自分たちで人生を切り開いていく。
- 12, 宗派間や民族間での対立はあるが、イラクはそれで長くやってきた。米国が入ってきて勝手にそれをこわし立て替えている。国境を開けた状態にしているので、テロリストや諜報機関が入国している。外部から来たテロリストが問題を起こしては去って

いく。

- 13, イラクはこのままでは米国流の資本主義に則ったシステムに作り変えられ、これまであった人同士のつながりが希薄になっていくのではないか、という懸念がある。
- 14, イラクでは医師はしばしば殺人の標的にされるが、現地に残って子供の面倒をみなければならない。
- 15, 人道支援と、医師として、医師教育プログラムが支援により実現すれば、と思う。

続いて、「海外支援NGOのありかた」についての話。NGOの活動についての話は、特定NPO法人日本ボランティアセンター(JVC)理事の熊岡路矢さんを迎えて行われました。

緊急時に際し、国際NGOは、

- 1. 準備をし、緊急対応計画を立てる
- 2,他の団体(赤十字など)と連帯の意思表示を交わし、資金協力する
- 3,終了後、復興支援をする

という手順を踏むものらしいのですが、今回は準備をしたり計画を立てたりする時間がなかったとのこと。この度のJIM-NETの緊急救援指針としては

- ・被災地に対する緊急人道支援
- ・これまで支援を行ってきている、がんの子どもたちの保護
- ・イラク情勢への日本社会での注意換気

があったそうです。

国際支援を行うNGOの規範には次のようなものがあるそうです。

- ・軍とは一線を画す
- ・ビジネスにしない

NGOには全く軍から独立して活動する場合と、完全に軍に守られて活動する場合があるそうです。そのほか、撤退という選択肢もあり、その際には、その理由を宣言して引き上げる、ということがあるそうです。JIM-NETは2004年以降、イラクから引き上げ外から支援を行っており、支援は継続できている一方で現地に負担をかけている面があるとのことでした。

熊岡さんから、石油のためにイラクに 侵攻したブッシュ政権に対しての明確な 批判があり、通訳を介して聴いていたフ サム医師が嬉しそうでした。熊岡さんの 言葉は次のようなものです。

・ サダム時代は確かに問題があったが、 国(行政)は機能していた。産科小児 病棟の支援ができ、医師や看護師も



活動ができていた。

- ・ いまだに戦争をした意味がわからない。石油のための戦争だったのか、イスラエルの ための戦争だったのか。日本でこれについて議論が起こっていないのが残念だ。
- ・ 戦争で、ブッシュ一族、チェイニー一族、ラムズフェルド一族が経営する企業がうる おった。
- ・ あの戦争を止められなかったのが残念。本来、人道支援など、する必要がないことが ベストなのである。止められると思った瞬間もあった。
- ・ 赤新月病院の隣の見本市会場がクラスター爆弾で攻撃され、病院も被害を受けた。
- ・ 軍の人道支援は、個人的にはまやかしだと思う。戦争を肯定し、人々の中に入ろうと するもの。国連でも「一般的に軍隊は人道支援を行うべきではない」とされている。 軍が行うと、NGOが狙われる。

最後に、日本の安全保障を考えるなら憲法9条を維持すべきだ、という話を…。

自衛隊がイラクに派遣されてから、それまで現地で安全に活動できたのが、危険性が増したそうです。先日正木高志さんからもそううかがい、短期間に2回同じことを聞いたことになるのですが、「軍備を放棄していることが自分たちを守る」ということを、覚えておきたいと思いました。



フサーム・マフムード・サリッヒ医師(38歳)

イラク南部の都市バスラのバスラ大医学部を1993年に卒業し、地方の病院での研修などを経て、99年からバスラ産科小児科病院(Basra Maternity & Child Hospital)に所属。専門は小児がん。湾岸戦争(1991年)以降、バスラで増加している小児白血病の治療のため、2004年に6か月、2005年に3ヶ月セイブ・ザ・イラクチルドレン広島の招聘で広島大大学院医師薬学総合研究科の小林正夫教授(小児血液腫瘍疾患)のもとで研修。

We are staying (ここに留まる)

この数日前に、私たちは最良の友の一人を失った。仕事だけに関心を持ち、全てを患者に 尽くす、そういう友人だった。昨日は、口を撃たれて死んだ隣人もいる。彼らが隣人の事務 所の同僚を殺害した時に大声を出したからだ!!!

先月のこと、私たちは医学博士号をもつ若い内科医を失った。彼は、スカイ・ソルジャー (天空の兵士) と呼ばれる者たちの犠牲になった。天空の兵士たちのことは、本当かそれと もでっちあげか? 天空や天空の神から、どのようにして彼らが人々の命を奪う権利を得た と考えたのかは分からない。誰もが、こうした人々は潜在的な攻撃対象であって、自分の番を待っていることを知っている。

これがこの国での人々の状況であり、特に、今イラク国内にいる教育を受けた人々、医者 や科学者、司法に従事する労働者がそうであり、理髪師や野菜売りのようなつましい人々た ちでさえそうである。一部の特権的な人を除いて誰も守ってくれる法律など持っていない。

私の国は思い浮かぶ全ての犯罪に苦しめられている。人々は殺される理由も知らない間に死んでいる。犯罪者たちは公務の陰に隠れ、誘拐犯は金のために、また殺人者は宗教の仮面の陰に隠れている。女性でさえも禁忌を超えたという理由以外なにもないのになぶり殺しにされる。だが一体、誰がその判断するというのか?? 犯罪者、無知で愚かな者たちは時には人々に復讐するために、犯罪者によって口実に使われる。

酷い治安状況によって、無辜の人々、家族や女性やこどもが命を失っている。

家族は、人々に仕事に行くのを止めて欲しいと言ってくる。一歩毎に多くの危険があるからだ。命を守るためには自宅で座っていなければならないとは! これはどういう生なのか?我々は、頑丈な城の中にいたって死がだれにもやって来ることは知っている。だから、これこそ、敵が我々に望んでいることだと分かっている、つまり、働くのを止めること、患者を診察すること、息をすることを止めるのを。しかし、これが我々の尊厳を守る生活だろうか???

だが、病院に行けば、もっと多くの苦痛と落胆がもたらされる。なぜなら、様々な伝染病や栄養失調や悪性腫瘍に侵される多くの患者がいるからだ。人々は、病院にきちんとした機材も薬もないために死んでいる。社会には腐敗と無責任がはびこっている。責任があるはずと思われる人の誰も国やそこに住む人を気づかわない。

武器なく闘うことは困難である。しかし、我々には信念がある。今の状況にほとんどの人が失望し挫けさせられるが、我々は患者を置き去りには出来ない。逃げることは出来ないのだ。この国が我々を必要としていること以外は考えることが出来ない。我々は、全てを置き去りにすることは出来ない。我々は、敵に我々を殺させはしない。我々の心を破壊させはしない。敵が我々を支配し、脅すのを許してしまうなら、彼らはきっとそうするだろうから。イラク人は平和的な民族だ。しかし、この国を敵に譲り渡さないように全てのことをやるだろう。最終的にはそれが自分の命を懸けることになっても。敵は我々には他の選択肢はないことを知るべきだ。我々は、去りはしない。

熊岡 路矢(くまおかみちや) 東京生まれ

特定NPO法人:日本国際ボランティアセンター(JVC)理事/前代表理事。80年、タイでインドシナ難民の救援にあたる。JVC創設に参加。85年、JVCカンボジア事務所設立。初代代表。世界各地で緊急人道支援。

03年1月、サダム政権時、赤新月社産院、こども病院への支援に参加。日本ではイラク問題に関し、戦争ではない、平和的な解決を訴える。「開戦後」の03年8月、04年2月に現地入りし、小児ガン治療を支援。ヨルダン、パレスチナへの人道支援での訪問重ねる。



東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」客員教授、法務省難民審査参与員、UN HCR駐日事務所アドバイザー、毎日新聞社国際交流賞審査委員など歴任。

もうひとつのサミット市民サミット2008

北海道の洞爺湖で行なわれたG8サミット(主要国首脳会議)に合わせ、7月6~8日に『市民サミット2008(オルタナティブサミット)~世界は、きっと、変えられる。』が開かれ、NGOが主体となって環境、平和・人権、開発・貧困などのテーマ別分科会や、ワークショップ、セミナーが行なわれた。またこれと前後し、「G8市民ウィークス」と称して、日本だけでなく世界各地のNGOや市民により札幌市



内で先住民族サミット、フェアトレードフェスタなどの様々なイベントやシンポジウムなどが行なわれた。JIM-NETスタッフも以下の集会やイベントに参加し、ブース出展、トーク、ライブ等を行った。

- 7月2日 インフォセンター・国際交流キャンプオープニングパーティー
- 7月3日 「軍隊/基地と女性」 国際シンポジウム (ブース出展)
- 7月4日 ワークショップ「戦争は日本の原子力産業とつながっている」in 国際交流キャンプ札幌(大嶋・榧野がJIM-NETの活動内容の紹介・イラクのがんや白血病の子どもたちの紹介、劣化ウラン弾とはどのようなものなのかというトークの後、参加者との交流を行なった。)



- 7月4日 先住民族サミット アイヌモシリ 2008ライブ
- 7月5日 チャレンジ・ザ・1万人のピース ウォーク
- 7月6日 高尾山の自然を守る環境NGO虔 十の会『やおよろず地球祭り』(ブース出 展、大嶋のピアノ弾き語りライブ)
- 7月7日 トークセッション『イラクの現状は? 復興は? G8諸国の責任を問う!!』 話し手: JVC(日本国際ボランティアセンター)高橋清貴/JIM-NET佐藤真紀 HRN(ヒューマンライツナウ)伊藤和子

メディアはもとより市民の意識からもイラクが遠のいている。 市民サミットでは、エネルギーや食糧・環境・人権問題に比べて基地問題や米軍問題などに関するシンポジウムがとても少なかった。イラク開戦から5年。電気は日に2時間ほどしか来ず、病院には薬はおろか水もない。そのような状況がイラクでは今も続いているが、G8サミットへの提言を行な

う市民サミットですら、イラク戦争とは何だったのかという検証・議論が少ない。こういった状況を危惧した私たちイラクに関わるNGO3団体がシンポジウムを行なうことになったのだが、始まりが月曜日の朝10時。平日で朝早いから誰も来ないかも…と心配していたのだが、予想よりも多くの方が参加してくださった。参加者からもそれぞれの所属団体の活動報告がなされ、良い情報共有の場となった。

イラクも、エネルギー問題も、反戦問題も、すべてが私たちの生活につながっていて、自分に関係ない問題は何一つない。あらためてそのことを深く感じた一週間だったが、その中で、特に印象に残ったことは、『目の前に見えないのでリアルに感じていないが、私たちのすぐ横には基地がある』ということだった。米兵による暴行事件があっても、米軍は地域にお金を落とすので無くなること困るなどの声もあるが、私たちの平和を脅かすもの以外の何ものでもないと思う。愛知県の航空自衛隊小牧基地は、愛知県営の名古屋飛行場に隣接しており、滑走路は共有して(自衛隊が借りて)いる。イラクにおいて行なわれている航空自衛隊による空輸活動のC130輸送機は、この小牧基地から飛びたっている。県営のみんなの財産である飛行場からアメリカ軍の後方支援が行なわれているのだ。それだけではない。沖縄の米軍基地をグアムへ移転する際、日本はアメリカよりも多くの費用を負担している。平和を脅かすものに、どうして私たちの税金が使われているのか?

米軍再編・基地拡大の「被害」にあっているのは、日本だけではない。韓国の先祖代々譲り受けた土地を奪われた平澤(ピョンテク)の農民たち、グアムの土地を強制接収されたチャモロ族の人たち。現地からの生の声を聞き、アメリカの軍事政策に追従しない社会の構造、軍・基地に依存しないで生きていく方法を作っていかなくてはならないと考えさせられた。

G8サミットは、600億円の経費と2万1千人もの警官が動員され、かつてない規模で行なわれたが、その割りには結果が出なかったという見方が大半だ。しかし、世界各国から

集まったNGO、先住民族の人たちの運動の盛り上がり、市民メディアの活躍など、市民が国・政府へ発信し、市民が地球を動かす第一歩になったことは間違いない。

(大嶋 愛)





B5サイズのパネル 絵:サブリーン

各地に広がる絵画展

イラクの子どもたちのことを知ってもらいサポートし ていただくため、JIM-NETでは子どもたちが描いた絵の パネルの貸し出しを行っていますが、明るい色彩の子ど もたちの絵はどこでも大好評で、絵画展の輪が広がって います。

去る6月23日(月)~7月5日(十)に立川市(東京)で開催さ れた絵画展は、今までの絵画展とは少し違っていました。

この絵画展では、昨年の国連総会に合わせて行われたICBUWニューヨーク大会で展示し たポスターのうちの10点に加え、JIM-NETスタッフも見たことがないB5サイズのパネル が12点展示されていたのです。じつは、このB5サイズのパネルは、イラクの子どもたちの 絵がすっかり気に入ってしまった主催者の一人で美術造形家の石垣文子さんが作製したも のです。

立川の絵画展は、地域活動応援雑誌「のんびる」に掲載された、鎌田實代表のインタビ ュー記事のとなりにあったJIM-NETからの「イラクの子どもたちの絵画展をひらきません か?」の呼びかけを読み「一緒にやろう!」と読者のひろばへ投稿があったのがきっかけで 実現したもので、活動の中心になったのは、練馬区の会社員西田誉子さん、NPO高齢社会 の食と職を考えるチャンプルーの会代表の紀平容子さん、それに前述の石垣文子さんの三 人。絵画展だけでなく、6月28日には佐藤真紀事務局長からイラクの話を聞く会も開催し てくださいました。なお、この12点の絵画パネルは、会期終了後JIM-NETが引き取り、8

月1~5日には笠間市(茨城)のプライベートギャラリー、アト リエ Gutta(☎0296-78-2159)の『第5回・ぷちっと展覧会』 で展示されます。

絵画展を開催される方の中には「リピーター」も少なく ありません。去る7月15日(火)~21日(月)平塚市(神奈川県) で開かれた『第6回「平和を語りつぐ」手をつなごう平和 のWA展』では、以前の反響が大きかったのでぜひもう一 度、ということで、平塚市美術館の市民ギャラリーに子ど もたちの絵画パネルが再登場しました。この秋には目黒ユ ネスコ協会が2度目の原画展の開催を予定しています。

北海道では『旅するポスター展』が続いています。イラ クの子どもたちの絵は皆さんの住む町のすぐそばまで来て います。

※ 絵画パネル、ポスターの貸し出しにつ いてのお問い合わせは、JIM-NET東京事 務所(203-6228-0746)にお願いします。



B5サイズのパネル 絵:バスナ

JIM-NET便り 2008年夏号

発行:日本イラク医療支援ネットワーク

発行日:2008年8月1日

〒171-0033

東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303